

詫間キャンパスの外部試験結果を基にした 英語学力の変遷と背景

--英語という教科の特徴を考えながら--

水野 知津子*

Improvements of Students' English Ability Based on GTEC and TOEIC Scores with Its Teaching Backgrounds at the National Institute of Technology, Kagawa College, Takuma Campus

Chizuko MIZUNO

Abstract

This study shows how students' English ability has improved based on external examinations' scores at the National Institute of Technology, Kagawa College, Takuma Campus. The examinations are mainly GTEC for STUDENTS and TOEIC. Various attempts have been made to develop students' English ability at the College, Takuma campus over the last decade. There have been several approaches implemented to improve students' English comprehension, including Extensive Reading and Collaborative Learning. There appeared to be some improvements and better results in students' English ability when we looked at their GTEC and TOEIC test scores last three years. However, when it is announced publicly that a particular teacher who is in charge of students who take external examinations has to take all or most of the responsibility for the result without previous notice to the teacher or the teacher's acknowledgment, the teacher has tremendous pressure and burden. Forcing the particular teacher to be in charge of the students who take these examinations continuously without her permission must be avoided. The teacher was not given any right to refuse the demanding role at all. The total volume of the work and responsibility the teacher had should have been considered equally and impartially. As a teacher is expected to be a good role model for his or her students, humanity development is necessary not only for students but also for teachers. This suggests a need for continuous efforts to improve English teaching and its environment with a longer longitudinal evaluation.

Keywords: Humanity Development, Extensive Reading, Motivation, Teachers' Roles, Features of English Language Teaching

1. はじめに

グローバル化した世界において、自分の意見を主張し、対等にコミュニケーションできる能力は不可欠である。また、人間性を磨いておく必要もある(水野、2016)。理系高専学生は英語力の必要性は認識している

が、英語力は高校生と比較すると一部の高専を除き、かなり低い(森、2015)。この論文では詫間キャンパスでの英語力向上への取り組みを振り返り、その結果と背景を英語科独自の特徴と共に考察したい。

香川高専学生には英語嫌いや英語への苦手意識を持っている学生が多かった(水野、2016)。しかし、2013年4月に「うちの学生は英語が大嫌いだ。」と言ってい

* 香川高等専門学校詫間キャンパス 一般教育科

た詫間キャンパスのベテラン専門教科教員が2016年1月には「英語が好きな学生が増えている。専門の科目のほうが苦手だという学生もおり、専門科目の教員として頑張らなければならない。」という発言があるほど状況は改善されてきた。外部試験GTECのスコアは英語力向上を示し(森, 2016)、4年生全員が受験したTOEICでは、2015年と2016年のスコアが4年生授業担当教員が驚くほど伸びた(出淵, 2016)。

2. GTEC for STUDENTS 導入とその結果変遷

2.1 GTEC for STUDENTS の導入

詫間キャンパスでは、2013年度からGTEC(Global Test of English Communication)という株式会社ベネッセコーポレーションが運用する英語試験を受験させている。実施しているのはGTEC for STUDENTSで、特に高校生を対象にしたものである。リーディングとリスニングに加えてライティングの試験があるのが特徴で、評価は絶対評価で、技能別英語能力の伸張度がわかりやすい(森, 2015)。

このライティングは自分の意見を理由や具体例をつけて説明するものである。採点者である海外の英語ネイティブを納得させる必要があり、スピーチにも有効であるだけでなく、大学入試に備える高校生にとっては大きな力をつける有益な試験であると言える。このようなライティングの試験はTOEICにはもちろん、この時点では英検にさえ含まれていなかった。有益性がある一方で、授業で自分の意見を述べ、英語を書くことが苦手な学生にとっては大きな負担になる可能性がある。また、添削や英語嫌いの多い学生を指導する教員にとっては大きな負担になる。

GTECを採用したきっかけは2013年度から2014年度にかけて高専機構において立ち上げられた「国際コミュニケーション力向上事業」である。「学生の英語力向上プログラム」はその中の一つのプログラムで、明石高専、松江高専、阿南高専、香川高専詫間、高知高専、沖縄高専の全国の国立高専が参加し、2014年度には八戸高専、鶴岡高専、鳥羽高専、和歌山高専が加わり、2千人の学生を対象にした(森, 2015)。

2.2 最初のGTEC結果(2013年度)

詫間キャンパスで実施された最初のGTECは2013年12月に本科1年生123名、2年生126名を対象にしたものである。1年生はGTEC Baseタイプ、2年生はGTEC Advancedタイプを受験した(森, 2015)。本科3年生は受験していない。2013年度に3年生が受験したのはTOEICである。3年生のGTEC受験は2014年度からであ

表1. 総合点の比較(2013年度)

| | |
|--------------|------------|
| 詫間1年生総合平均点 | 355.4 (7位) |
| 9高専1年生総合平均点 | 377.7 |
| 全国高校1年生総合平均点 | 405 |
| 詫間2年生総合平均点 | 371.5 (9位) |
| 9高専2年生総合平均点 | 424.4 |
| 全国高校2年生平均点 | 445 |

る。詫間キャンパス学生の平均スコアと前述のプログラム参加校および高校生の平均スコアは表1の通りである。

表1から高専全体のスコアが1年生、2年生共に高校生の平均を大きく下回っているのがわかる。詫間キャンパスの平均数値は9高専よりさらに低く、下位に位置している(森, 2015)。筆者が香川高専(高松キャンパス)に赴任したばかりの2013年4月の入学式で詫間キャンパスのベテラン専門教科教員から聞いた「学生は英語が大嫌いだ。」という話はこの状況からも納得することができる。

2.3 最近のGTEC結果(2014年度～)

2014年度に実施されたGTECの結果は表2の通りである。1年生は125名、2年生は122名、3年生は127名が受験した。1年生の平均点は前年度よりも低くなったが、2年生(前年度の1年生)は前年度よりスコアを伸ばすことができた。3年生(前年度2年生)も前年度よりスコアを伸ばすことができた。筆者は1年間高松キャンパスで勤務した後、2014年度から詫間キャンパスに赴任した。詫間キャンパスでは2016年度までの3年間3年生の担当になり、外部試験結果の責任者として指名された。2016年度には3年生に加え、2年生の外部試験結果の責任者になり、成績を上げるよう指示された。

表2. 2014年度GTEC結果

| | |
|-----------------------|-------|
| 詫間1年生総合平均点 | 388.1 |
| 全国高校1年生平均点 | 412 |
| 詫間2年生(2013年度1年生)総合平均点 | 385.1 |
| 全国高校2年生平均点 | 446 |
| 詫間3年生(2013年度2年生)総合平均点 | 419.8 |
| 全国高校3年生平均点 | 461 |

2015年度のGTEC結果は表3の通りである。2年生は122名、3年生は117名が受験した。2年生、3年生ともに前年度よりスコアが伸びた。2年生、3年生ともにスコアを伸ばし、高校平均に近づいた。表4は2016年度の結果である。

表3. 2015年度GTEC結果

| | |
|-----------------------|-------|
| 詫間1年生総合平均点 | 375.7 |
| 全国校区1年生平均点 | 412 |
| 詫間2年生(2014年度1年生)総合平均点 | 429.6 |
| 全国高校2年生平均点 | 445 |
| 詫間3年生(2014年度2年生)総合平均点 | 445.2 |
| 全国高校3年生平均点 | 461 |

表4. 2016年度GTEC結果

| | |
|-----------------------|-------|
| 詫間1年生総合平均点 | 401.7 |
| 全国校区1年生平均点 | 412 |
| 詫間2年生(2015年度1年生)総合平均点 | 412.0 |
| 全国高校2年生平均点 | 445 |
| 詫間3年生(2015年度2年生)総合平均点 | 450.8 |
| 全国高校3年生平均点 | 463 |

3. TOEIC結果の変遷

3.1 2013年度3年生TOEICスコア

詫間キャンパスでは4年生は全員学校でTOEICを受験している。2013年度の3年生は外部試験としてTOEICを受験した。森(2015)によると、これは4年生になってスコアを伸ばすことができることを意図して実施したものであったが、2014年度に4年生になって再度受験した時の平均点は前年度3年生の時のスコアより低くなっていた。結果は表5の通りである。

表5. 2013年度3年生TOEIC IP 平均スコア

| | | |
|----------------|--------|-------|
| 2013年10月(3年生時) | スコア | 271.0 |
| 2014年1月(3年生時) | スコア | 278.8 |
| 2014年6月(4年生時) | スコア | 266.8 |
| 2012年度 | 高専3年平均 | 326 |
| 同 | 高校工業科 | 315 |

3.2 4年生TOEICスコア変遷

2013年度3年生が4年生になった時のスコアを示し

表6. 詫間4年生TOEICスコア変遷

| | | |
|--------|-----|-------|
| 2009年度 | 平均点 | 243.6 |
| 2010年度 | 平均点 | 270.5 |
| 2011年度 | 平均点 | 277.3 |
| 2012年度 | 平均点 | 250.7 |
| 2013年度 | 平均点 | 282.5 |
| 2014年度 | 平均点 | 268.1 |
| 2015年度 | 平均点 | 324.1 |
| 2016年度 | 平均点 | 333.7 |

たが、表6は他年度のスコアを加えたものである。最近2年間にスコアが大きく伸びてきているのがわかる。

3.3 全国高専生の英語力(TOEICスコア)との比較

高専生を対象にした英語力が学年ごとに示されたTOEICスコアと比較してみる。対象人数は16,951人である。平均スコアは349点(Listening 208点, Reading 141点)である。この表7から詫間キャンパスの最近2年間の4年生のTOEICスコアは全国レベル平均点337点に近くなってきているのがわかる。また、詫間キャンパスの1年生から伸び続けている英語力から効果的な英語授業が行われていることを証明しているとも言えるだろう。

表7. 高専生の英語力TOEIC結果より

| | |
|-------|----------------------|
| 高専1年生 | 373点(L:226点, R:146点) |
| 高専2年生 | 370点(L:222点, R:148点) |
| 高専3年生 | 332点(L:199点, R:133点) |
| 高専4年生 | 337点(L:202点, R:135点) |
| 高専5年生 | 369点(L:218点, R:151点) |

http://uguisu.skr.jp/toEIC/school_score.html

Retrieved on March 5, 2014

4. 外部試験結果と分析から

4.1 外部試験結果

詫間キャンパスでの外部試験の結果をみてきた。英語教育の取り組みの成果は2013年では外部試験(TOEIC, ACE BACEテスト)には出なかった(森・ジャンストン、2013)。2013年度のGTECでは1年、2年ともにスコアは高専の中でもかなり低かった。しかし、2014年度からは2年生(図4)、3年生(図1、2、3参照)ともに前年度より平均点が伸び続けている。

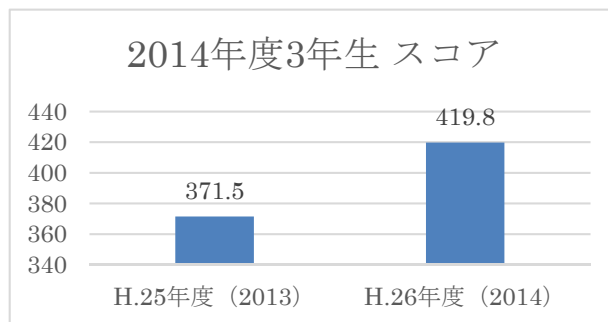


図1. 2014年度3年生GTEC平均スコア

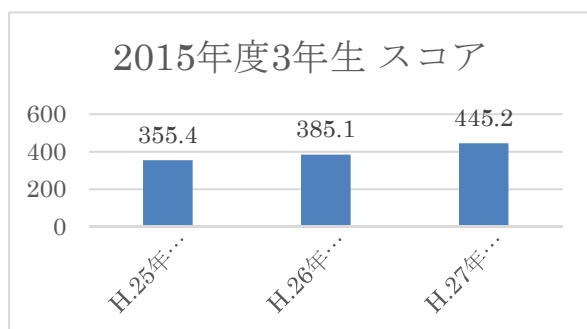


図2. 2015年度3年生GTEC平均スコア

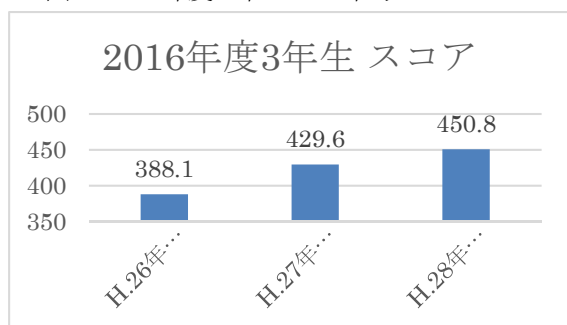


図3. 2016年度3年生GTEC平均スコア

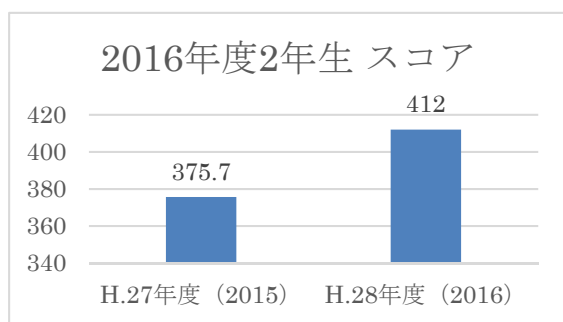


図4. 2016年度2年生GTEC平均スコア

4.2 外部試験結果分析から

筆者が詫間キャンパスに赴任したのは2014年度(平成26年)で、担当した学年は最初の2年間(2014年度と2015年度)が1年生、3年生、5年生で、3年目の2016年度は2年生、3年生、5年生である。指示されるまま担当した。3年生は詫間赴任中の3年間ずっと担当した。外部試験について特に説明を受けた記憶はない。後になって3年生の外部試験は四国英語学力試験として実施され、結果が大きく公表されることを知った。また、英語科から教務主事あてのメールが届き、その中で、①3年生の外部試験のスコアは前年度より下がってはいけない、②3年生の授業担当責任者は筆者である、と筆者の名前が明記されていた。③として、担当者だけに負担がいかないようにしなければならない、とあったが、赴任中に担当者が変わることはなかった。3年間、新しい教材を使用して3種類の授業を一から準

備した。外部試験の結果は前年度より下がってはならず、学生の試験結果の責任を取るの筆者であると理解し、筆者は大きな責任と重圧を感じた。3年間すべてのクラスで英語力向上に有効とされる指導法を自分なりにどんどん取り入れた。外部試験結果が伸びたことで実践した指導法のある程度の効果が示されたと考えている。

3年目の2016年度授業担当予定クラスは1年生、4年生、5年生であった。しかし直前に2年生、3年生、5年生担当に変更された。外部試験を受ける2年生と3年生を同時に担当しなければならなくなった。命令であった。いずれの学年も外部試験を受験し、そのスコアが公表される。責任は前の2年間の2倍である。やるしかなかった。

2年生を教えるのは初めてである。この2年生に対しては前任者より学生の英語力向上のために追加で大学入試問題集1冊の使用と、この問題集から毎回小テストをするよう指示を受けた。週1回90分の授業で多読とリスニングを実施する予定であった。これに大学入試問題集が加わった。2種類の教科書と多読を実施せざるを得ない状況となった。結果として多読の実施時間が減った。大学入試問題集の内容が難しい、範囲が多すぎる、という学生からの声が出た。小テストの代わりに重要表現を絞り、英文の数を減らしてディクテーション活動に変更し、どんどん音読をさせた。2年生の外部試験結果が多読の時間の減少にもかかわらず向上したのはこのディクテーション活動が有効であったと考えられる。

担当したすべてのクラスで英語力向上に有効な音読活動や指導法を取り入れた。このことが外部試験スコアの向上につながったものと考えられる。2016年度(平成28年度)の外部試験結果は2年生、3年生とも全体的に向上していた。しかし、ライティングの伸びに関しては前年度より上昇スコアが小さくなっていった。これは3年生約130名の指導に加え、2年生約130名の、合わせて260名の学生のライティング指導を筆者一人で指導しなければならないことに無理があった結果だと考えられる。授業内外の指導時間不足を補うものとして中間考査と期末考査で問題の一部として出題したが、十分な指導をするには無理があったと言わざるを得ない。大学などでのライティングの授業のクラスサイズは20名くらいが適切な人数であるとよく聞く。浦野(2013)は大学3年次のライティング科目の定員を15名として実施している。文部科学省による平成26年度実施された全国高校3年生約7万人対象の英語力調査では、自分の意見を英語で表現する活動を実施し

ている高校は全体の3分の1程度と記述している。

外部試験結果は公表される。スコアは前年度より下がってはいけない、責任は担当者である筆者にある、という英語科からの教務主事へのメールを読み、筆者は大きな責任と重圧を常に感じていた。期待に応えるべく、筆者の授業では、ペア活動で学生にどんどん英語を使うような活動を取り入れた。英語力向上に有効であった一方で、ペア活動を嫌う学生や、講義形式に慣れた学生からは「疲れる」、「英語で話されても理解できない」、「英文を聞き、書き取り、丸暗記して何の意味があるのか」、「試験問題が多すぎる」等様々な批判や非難があった。外部試験結果の平均点が上がり、学生の英語力向上を実現でき、なんとか大役を果たせた。しかし、この外部試験結果向上の目標を達成する過程で、3種類の毎日の授業準備にも影響が出た。

5. まとめ

5.1 英語科の特徴

英語科の授業は文法授業を除き、教科書が変わると内容は全く異なる。同じ物語であっても書かれている英文のレベルが変わると、使用される表現や単語、文章が変わり、単語リストひとつとってみても授業準備は一からすべて作成する必要がある。文法授業なら教科書が変わっても内容はほぼ同じなので、順番を変更する、一度作った教材を何度も使用することは可能である。

筆者は以前高校で指導していたことがあるが、高校では英語の教科書を毎年変えることは常識になっていた。ひとつひとつの授業に対して、教材研究、授業の組み立て、進め方を考える必要がある。単語リスト、内容理解を深める資料作成、内容確認用の要約プリントなど、非常に多くの資料作成や準備が伴う。板書する時間を少なくしてできるだけ生徒に英語を使う活動を増やすことが求められていた。小テストが加われば負担はさらに大きくなる。高校では3単位以上の授業が多いこともあり、複数の教員で同じ種類の授業を担当し、教材作成を分担し、考査試験作成は順番に交代で行うことが多い。高校の英語教師であれば3種類の授業を担当することは非常に負担が大きいという認識を共有することができる場合が多い。

文法授業は他の教員が担当していたこともあり、常に3種類の授業準備と、中間・期末考査試験を一人で作成、行っていた。毎授業ごと、毎課ごとに小テストをする必要があるため、3種類の小テストの作成や採点、記録、確認なども加わった。これにスピーチコン

テストの英文添削、指導が加わる。公表される外部英語力試験で責任者となり、前年度より常にスコアを向上しなければならぬことは筆者の能力をはるかに超えたものであったようである。

5.2 今後に向けて

高専のこともよく理解できていないまま英語科からの指示に従い、毎年、3種類の教材研究をし、授業準備を一から行っていた。外部試験結果向上にむけて精一杯努力した。有効と考えられる指導法を毎回の授業に加えた。授業準備に莫大な時間と手間がかかり、連日夜11時頃まで仕事をしなければならなかった。担任をしているクラスに問題を起す学生がいたこともあり、2016年度の仕事量は今までで最大のものであった。今、振り返ると同じ教材を使用する事も可能だったと思うが、その時はそれを考える余裕もなかった。時間的、精神的な余裕のなさで学生の苦痛を感じることができなくなっていた。コミュニケーションを苦手とする高専生の現状をもっと感じ、学生のいやがるペア活動を減らし、学生の好む講義形式の授業をもっと加えることで英語授業を学生が楽しめるようにバランスを考えることが必要であった。学生の気持ちに寄り添う余裕がなくなっていたように思える。

教員の役割は大きく、教員には多くのものが求められる。常に学び、授業を改善し続ける必要がある(水野, 2014)と、自分に言い過ぎたかもしれない。自分に余裕があれば学生も余裕を感じ、自分が授業を楽しめば学生も授業を楽しんだかもしれない。外部試験結果はもしかすると、もっと向上していたかもしれない。この経験を今後に生かしていきたい。

参考文献

- 1) 出淵 幹郎、学内 GTEC 結果資料、2016
- 2) 伊佐地 恒久、「日本人高校生英語学習者に対する [10分間多読] の効果—読解力と読解ストラテジーの認識について—」『英語授業研究学会紀要』. 第 19 号, pp.4-15、2010.
- 3) 泉恵美子・加賀田哲也・松下信之、「スローラーナーの英語指導をどうするか?」, 関西英語教育学会 (KELES) 2014 年度 (第 19 回) 研究大会企画ワークショップ資料、2014
- 4) 水野 知津子、「英語教師に求められるもの—外国語学習法略の動機付け観点からの考察」『香川高等専門学校紀要』 第 5 号, pp.89-98、2014.
- 5) 水野 知津子、「香川高専学生の英語苦手改善・英語力向上への試み—多読を考える—」『香川高等専門

- 学校紀要』第6号, pp.81-86、2015
- 6) 水野 知津子、「香川高専学生の英語苦手改善・英語力向上への試み—多読の有効性を考える」『関西英語教育学会紀要』第39号、2016
 - 7) 文部科学省、平成26年度英語力(高校3年生)結果の概要、英語教育改善のための英語力調査事情報告、2015年5月
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1358258.htm
 - 8) 森 和憲・ジャンストン・ロバート、
「香川高等専門学校詫間キャンパスにおける英語教育の現状と課題」『香川高等専門学校紀要』第3号, pp.101-108、2013.
 - 9) 森 和憲、「香川高専詫間キャンパスにおける外部試験結果を基にした授業改善の試み—GTEC, TOEIC, TOEIC Bridge の結果を基に—」『全国高等専門学校英語教育学会研究紀要』(34)29-38、2015年3月
 - 10) 森 和憲、「香川高専詫間キャンパス英語外部試験結果」校内資料、2016
 - 11) 鈴木 寿一、「これで良いのか入試対策授業」外国語教育メディア学会関西支部中学高校授業研究部会、英語の教え方研究会、より良い英語教育を考える会共催「第22回中学高校教員のための英語教育セミナー」発表資料、2016.
 - 12) 竹内 理、『より良い外国語学習法を求めて』東京：松柏社、2010.
 - 13) 津田 幸男、「人格形成のための教育：私の実践」筑波フォーラム79号 pp.43-44.
<http://www.tsukuba.ac.jp/public/booklets/forum79/11.pdf>, retrieved on March 17, 2016.
 - 14) 浦野 研、「大学のライティング授業におけるTBLTの導入」2013年度LET関西支部秋期研究大会発表要項、2013